◆問題はまだまだ山積です

宮城県社会福祉協議会
みやぎボランティア総合センター地域福祉課
課長　高橋　賢一氏

日頃のご支援に感謝いたします。沿岸部のがれきは片づき始め、少しずつきれいになってきましたが、津波前のような生活に戻れる保障はありません。ひとまず県内の避難所は 11 年末にすべて閉鎖となりましたが、仮設住宅や県の借り上げ住宅、あるいは県外で生活されている方々は多く、その実態の正確な把握もこれからです。「仕事と生きがいがない」とおっしゃるのを聞くのは辛いですね。

震災以前から社協が状況を把握できている要援護者の方も大事ですし、ご高齢の健常者の支援をどう進めていくかも大きな課題です。「私は独りでがんばるから」とおっしゃる方にどこまで支援できるかですね。皆さまには、現地に来ていただくこともありがたいのですが、まずは被災地のことを忘れないでいただきたいと思っています。これからもよろしくお願い申し上げます。

バスボランティアに多くの生協参加

茨城県生協連では、発災当初の福島県いわき市への支援をはじめ、継続した支援活動を行なっています。6 月には茨城県生協連と茨城県社会福祉協議会が共催し、「宮城県災害ボランティアバス」を運行。以降、月に 1 度を基本に日帰りのバスボランティアを行ない、11 年 12 月末までに会員生協、取引先など累計 250 人が参加しました。11 月には、草が生え放題だった JR 仙石線沿線の草刈りを行い、菜の花の種をまきました。12 月に側溝の清掃ボランティアに行った際には、もう芽吹いていたそうです。

また、講演会「放射性物質とわたしたちの健康とくらし」や「復興と災害ボランティア～新たなステージでの役割を考える～」を行なうなど、常に何が求められるかを敏感にキャッチしてリサーチをしながら活動を行なっています。

（http://www.ibaraki-kenren.coop/）

側溝の泥をかき出し、土のう袋につめる。
3 時間で、250 袋分の泥を清掃。

12 月には、すでに芽吹いていた菜の花。
「春が楽しみ」とのことです。

「もう一度編んでみたい」編み物セットプレゼント

チャリティーで行なわれた、紙コップでの万華鏡作り。70 人の子どもが参加。

全区域の区域委員（組合員）が生産者へ応援メッセージを送った。

エフコープでは、組合員と共に支援活動を継続しています。組合員クラブの一つ「エコサークルベスタ」は福岡市在住のアーティストらに「被災地の子どもたちを元気にするために」をテーマにバッグのデザインを依頼、展覧会を実施しています。福岡市での開催時には万華鏡作りも行ない、材料代の 100 円を支援募金として、バッグとともに福島県南相馬市の小学校へ贈りました。また、大里地区では手作りのモチーフによるマフラーやひざかけ、毛糸に編み棒をセットしたものなどを宮城県気仙沼市に贈りました。被災地では「今さら編み物なんて」と言われていた方が、マフラーを目にした途端に「もう一度孫のために編んでみよう」とうれしそうに毛糸を持ち帰られたそうです。この他にも、岩手や茨城のボランティア団体と連携して支援物資を贈る等、さまざまな活動を行なっています。

（http://www.fcoop.or.jp/index.html）

【一言メッセージ】

・支援者の元気がなくなっています。楽しく、疲れず支援を続けていくことが大切です。（岩手・I さん）

・家族の中でも、放射線に対する考え方が異なり、意見が対立します。（福島・S さん）